アルベルトゥス・マグヌス
『「原因論」註解』における宇宙論

小　林　　剛

序

私は拙論で、アヴィセンナ『治癒の書』における宇宙論を紹介した。また、それをアヴェロエスが批判的に拡大解釈しているのを見た[1)]。本稿では、これらアラビア哲学者たちの宇宙論を、13 世紀西洋の神学者・哲学者であるアルベルトゥス・マグヌスがどのように受容し、変容させたかを検討する[2)]。

アルベルトゥス・マグヌスは、トマス・アクィナスの師として有名であるが、当時イスラーム世界から導入された西洋初の体系的で自律的な哲学を、最初期に、全体的に自家薬籠中のものとした思想家として極めて重要である。近年多くの研究者から注目を集めており、2013 年には Brill 社から *A Companion to Albert the Great* が出版された[3)]。その哲学に関する章の最後では、本稿の後半で検討するアルベルトゥス独自の形而上学「流出流入論」が取り上げられている[4)]。

1）小林剛「アヴィセンナ『治癒の書』における宇宙の発出について」紀要哲学（中央大学文学部）第 64 号、2022 年、1-18 頁。

2）本稿の内容と上掲拙論の内容とを是非比較していただきたい。

3）*A Companion to Albert the Great: Theology, Philosophy, and the Sciences,* ed. Irven M. Resnick, Leiden/Boston, Brill, 2013.

4）Isabelle Moulin and David Twetten, “Causality and Emanation in Albert”, *op. cit*, pp. 694-721.

本稿が焦点を当てるアルベルトゥスの主著の一つ『「原因論」註解』[5]は、二巻から構成され、第2巻が『原因論』を註解している部分であり、第1巻は、それに先立ってアルベルトゥス自身の見解を述べている部分である。『原因論』とは、『純粋善について』というアラビア語著作のラテン語訳で、『純粋善について』とは、5世紀の新プラトン主義者プロクロスの主著の一つ『神学綱要』（ギリシア語著作）が、9世紀頃アラビア世界で翻案されたものである[6]。

アルベルトゥスはこの『原因論』を、アリストテレスやアヴィセンナの文献から集められた命題集であると考えていた。だから、本稿前半からも明らかな通り、アルベルトゥス『「原因論」註解』は基本的にアヴィセンナ宇宙論の解釈という側面を強く有しているのである。

1．アルベルトゥスにおけるアヴィセンナ流出論の受容

アルベルトゥスは彼の『「原因論」註解』第1巻第4論考第8章で、アヴィセンナの流出論を、アヴェロエスの立場を取りつつ受け入れている。

> 引用1
>
> ところで「私たち以前のすべての哲学者たち」が前提とした命題、すなわち、自然本性の順序に従って、純一な一つのものに直接由来するのはただ一つしかないということを、私たちは前提とする。〔中略〕私たちも、普遍的能動知性が諸事物に能動・作用して諸事物を成立させるのはただ、能動的に知性認識し諸知性体を流出させることによってのみであるということを前提とする。〔普遍的能動知性は〕この仕方で〔能動的に〕知性認識するかぎりで自分自身によって事物を成立

5）正式な題名は *De causis et processu universitatis a prima causa*. 直訳すると「諸原因と第一原因からの宇宙の発出とについて」。

6）原因論については次を参照。https://sites.google.com/site/liberdecausisresearch/

させ、その事物に従って自身の知性の光輝が限界付けられる[7)]。

この箇所によれば、アルベルトゥスは二つのことを前提としている。一つは、「純一な一つのものに直接由来するのはただ一つしかない」ということである。この点でアルベルトゥスはアヴィセンナと共通し、恐らくアヴェロエスとも矛盾しない。実際アルベルトゥス自身この箇所で、彼ら以前のすべての哲学者たちがこのことを前提していると語っている。そこには当然アヴェロエスも含まれていると思われる。なぜなら、ここで言われている「哲学者たち」とは恐らくペリパトス派（アリストテレス主義者たち）のことだろうからである。

もう一つは、普遍的能動知性が、能動的に知性認識し、諸知性体（諸知性認識）を流出させることのみによって、諸事物に能動・作用し、諸事物を成立させるということである。普遍的能動知性とは、アヴィセンナが言うところの第一者、すなわち神のことであり、次の引用 2 で「普遍的第一能動知性」「第一知性」と呼ばれているのも同じであると思われる。また、「能動的に知性認識する」とは、知性認識することが即何かを生み出すことであることを意味していると思われる。

ここで注意すべきなのは、この普遍的能動知性が、諸知性体を流出させるだけでなく、そのことによって諸事物を成立させるとされている点である。このことからアルベルトゥスは、アヴェロエスと同様[8)]、普遍的能動知性が、自身に由来する一つのもの、すなわち知性の光輝を通じて、諸知性体始め諸事物をも成立させると考え、そのような仕方でアヴィセンナ流出論を受容しているように思われる。知性の光輝が「限界付けられる」ということについては引用 15 の後で検討する。

7）*Alberti Magni De causis et processu universitatis a prima causa*, ed. Winfridus Fauser, *Alberti Magni Opera Omnia,* tomus 17, pars 2, Monasterii Westfalorum, Aschendorff, 1993（以下 *De causis*）, lib. 1, tract. 4, c. 8, p. 55, ll. 72–76; 80–84.

8）前掲拙論 3 引用 2 参照。

引用 2（引用 1 の続き）

だから、普遍的第一能動知性がこの仕方で〔能動的に〕自身を知性認識するかぎりで、自身に由来するところの知性の光輝は第一形相であり、他のものに由来するという点を除いて、すべてにおいて、知性認識する者の形相を有する第一実体である。そして〔普遍的第一能動知性に由来する知性の光輝は〕他のものに由来するということにおいて三つの関係を有する。すなわち、①〔自身が〕そこに由来し、それによって自身に存在が在るところの第一知性との関係、②「〔自身がそれ〕であるということ」に即した、自分自身との関係、③〔自身が〕無に由来しているということに即した、可能態において在るものとの関係である。なぜなら存在する前は可能態に在ったからである。というのも他のものに由来するものはすべて生み出されたものであり、生じる前は可能態に在ったからである[9)]。

この箇所によれば、普遍的第一能動知性が自身を知性認識するかぎりでは、この知性の光輝は第一形相であり、第一実体である。しかし、この光輝が、普遍的第一能動知性自身に由来するのではなく、他のものに由来する場合、つまり、普遍的第一能動知性以外の知性体に受け取られているかぎりでは、この知性の光輝は三つの関係を有する。すなわち、第一知性（普遍的第一能動知性）との関係、自身との関係、可能態において在るものとの関係である。

「可能態において在るもの」とは、その直後の説明からすると、可能態に在るかぎりでの知性体自身のことであると思われる。ここでアルベルトゥスは可能態を、物体だけでなく知性体にも認めている。アヴィセンナにもアヴェロエスにも、類似した考えは見られるものの、少なくとも、可能態という概念を知性体に適用するのはアルベルトゥスに独自なことである

9）*De causis*, lib. 1, tract. 4, c. 8, p. 55, l. 84– p. 56, l. 1.

ように思われる。

引用 3（引用 2 の続き）

だから第一知性体が必然的存在を有するのはただ、自身が第一知性に由来するということを知性認識することに即してのみである。一方、自身が第一知性に由来していると、〔第一知性体が〕それによって知性認識するところの第一知性の光輝は、「〔自身がそれ〕であるということ」に従って〔第一知性体が〕自身を知性認識するのに即して、第一知性体において終焉する。そしてそれゆえ、下位のものがそれ〔第一知性体〕の下に成り立たなければならない。これが魂とも、諸天において魂の位置に在るものとも言われるところの第二実体である。他方、〔第一知性体が〕自身が無に由来し、可能態において存在していたと知性認識することに即して、可能態に在る実体の段階が始まらなければならない。これが第一形相の下に在る質料であり、第一作動対象と呼ばれるところの天体という質料である。実際この質料は可能的に分割可能である。そして〔天体という質料は〕魂の位置に在るこの形相〔第一形相〕によって照らされているかぎりで、或る程度どこにでも存在する運動〔天球運動〕を通して直ちに広げられており、知性体の光輝を捉えるために円形と円運動、すなわち天球の形と運動を受け取るのである[10)]。

ここで、第一知性とは別のものとして第一知性体（知性認識）が登場する。また、ここで語られている「必然的存在」とは恐らくアヴィセンナが用いた専門用語としてのそれであると思われる。アヴィセンナにおける必然的存在とは、現実態における知性認識のことであった[11)]。だから、ここで「第一知性体が必然的存在を有する」と言われているのは、第一知性体

10）*De causis*, lib. 1, tract. 4, c. 8, p. 56, ll. 1–18.
11）前掲拙論 2 引用 1 参照。

が現実態において知性認識するという意味であると理解して良いように思われる。

では、第一知性体が現実態において知性認識するのはただ「自身が第一知性に由来するということを知性認識することに即してのみである」というのは、どのような意味であろうか。次のように理解できると思われる。すなわち、「自身が第一知性に由来するということを知性認識する」とは、「第一知性に由来するかぎりでの自身を知性認識する」ということと同じである。だから、第一知性体が現実態において知性認識するとはすなわち、第一知性に由来するかぎりでの自身を知性認識することである。

次に、「自身が第一知性に由来していると、それによって知性認識するところの第一知性の光輝」と言われている。だから、第一知性体が第一知性に由来しているかぎりでの自身を知性認識するのは、第一知性の光輝によってであると思われる。これはすなわち、第一知性に由来するかぎりでの第一知性体とは、第一知性の光輝そのものであるということであるように思われる。このことについては、引用４の後で議論される。

この第一知性の光輝は、第一知性体が「『（自身がそれ）であるということ』に従って自身を知性認識する」、すなわち、自身を自身として知性認識するのに即せば、第一知性体において終焉する、つまり、第一知性の光輝でなくなる。では一体何になるのであろうか。

第一知性体において第一知性の光輝が第一知性の光輝でなくなると、「下位のものがこれ（第一知性体）の下に成り立たなければならない」。ここで言われている後者の「第一知性体」とは、第一知性に由来するかぎりでの第一知性体であるように思われる。なぜなら引用４で語られる通り、第一知性体が知性体、すなわち現実態における知性認識であるのは、第一知性の光輝のゆえだからである。

それゆえ、第一知性体において第一知性の光輝が第一知性の光輝でなくなるかぎりでは、第一知性体は、知性体であるというよりもむしろ「魂とも、諸天において魂の位置に在るものとも言われるところの第二実体であ

る」。なぜそうなのであろうか。この疑問を解くカギは、次の記述で、第一知性体が「自身が無に由来し、可能態において存在していたと知性認識することに即して、可能態に在る実体の段階が始まらなければならない」と語られているところにあるように思われる。

ここで「可能態に在る実体」とは、その後の記述からすると、第一知性体の可能態ではなく、「第一作動対象と呼ばれるところの天体という質料」、すなわち、第一天体のことであると思われる。なぜ第一知性体が「自身が無に由来し、可能態において存在していたと知性認識することに即して」第一天体という質料の段階が始まらなければならないのであろうか。

アリストテレスによれば、知性体は超時間空間的なので、分割不可能で部分を有し得ない。だから一つの天体に対して全体で接触せざるを得ない。それゆえ知性体は複数の天体に対して全体で接触することはできない[12)]。したがってアルベルトゥスも、アリストテレスの立場に従って、各天体それぞれにその魂・作用因たる知性体が一つ一つ別々に存在すると考えたように思われる。

知性体が別々に存在するためには、各知性体がそれぞれ異なる可能態を有していなければならない。つまり、各知性体、すなわち知性認識がそれぞれの可能態を有していることが、或る知性体が他の知性体ではなく自身であることの、また同時に、各天体の魂であることの、また同時に、各天体の魂が各天体という質料を必要とすることの可能根拠・必要条件でもあるのである。

だから上記の通り、第一知性体も、自身を自身として、つまり他の知性体ではないものとして知性認識するのに即して、「魂とも、諸天において魂の位置に在るものとも言われるところの第二実体」なのであり、また、「可能態において存在していたと知性認識することに即して」第一天体の段階が始まるとされているように思われるのである。

12）アリストテレス『自然学』第７巻第２章参照。

アルベルトゥスは、以上のような考えを次のようにまとめている。

引用 4（引用 3 の続き）
だから、生み出された諸実体の中で第一のものであるところの知性体〔第一知性体〕は、自身が第一知性に由来するということを知性認識することに即せば、第一知性の光輝のうちに在り、その光輝そのものであり、それゆえに知性体なのである。一方、「〔自身がそれ〕であるということ」に即せば、自身の光輝を他の何らかの存在に広げ、それゆえ魂、あるいは魂の位置に在るところのものへと広がる。他方、自身が無に由来し、可能態において存在しているということを知性認識することに即せば、質料的存在へと降下し、それゆえ、物体性の形相の下で第一作動対象であるところのものになるのである[13)]。

この箇所によれば、第一知性体は「自身が第一知性に由来するということを知性認識することに即せば、第一知性の光輝のうちに在り、その光輝そのもの」である。これはつまり、第一知性に由来するかぎりでの第一知性体（第一知性認識）とは、第一知性の光輝そのもののことであるという意味であると思われる。

また第一知性体は「『（自身がそれ）であるということ』に即せば、自身の光輝を他の何らかの存在に広げ、それゆえ魂、あるいは魂の位置に在るところのものへと広がる」。これは、第一知性体が、それ自身であるかぎりでは、第一天体の魂の位置に在るものになるという意味であるように思われる。

さらに第一知性体は、「自身が無に由来し、可能態において存在しているということを知性認識することに即せば、質料的存在へと降下し、それゆえ、物体性の形相の下で第一作動対象であるところのものになる」。こ

13）*De causis*, lib. 1, tract. 4, c. 8, p. 56, ll. 18-27.

の後半部分は、第一知性体が第一天体になるということを意味しているように思われる。つまりアルベルトゥスによれば、第一知性体は第一天体に、場所的運動だけでなく、実体形相も与えているのである。

アルベルトゥスは、以上のようにまとめた考えを、次のようなたとえによって補足説明する。

引用 5（引用 4 の続き）

このことのたとえは技術知のうちに在る。すなわち、もし技術知が、技術知自体もそこから成り立っているところの知性の光輝と関係付けられるならばその場合、〔技術知は〕固有な意味で知性的光輝である。一方もし技術知が、何かの形相であるということに即して、それ〔技術知〕自体で考察されるならばその場合、自身の像であるところのものを成り立たせることができる。他方〔技術知が〕、生み出されたものであり、〔それ自身では〕可能態に在り、現実態にはないのに応じて、自身の形相を可能的に受け取ることができるところのものを必要とする。なぜなら〔技術知は〕自身で存在する自身の形相をこの仕方で〔自身で存在するという仕方で〕成り立たせることはできないからである。そうではなく、この形相を〔技術知は〕、それを基礎付け限界付けるところのものにおいて成り立たせるのである[14)]。

この箇所で、「技術知が、技術知自体もそこから成り立っているところの知性の光輝と関係付けられる」場合とは、第一知性に由来するかぎりでの第一知性体、すなわち、第一知性の光輝そのものとしての第一知性体と、第一知性（の光輝）との関係のたとえであるように思われる。

また「技術知が、何かの形相であるということに即して、それ（技術知）自体で考察されるならばその場合、自身の像であるところのものを成り立

14）*De causis*, lib. 1, tract. 4, c. 8, p. 56, ll. 28–37.

たせることができる」とは、それ自身としての第一知性体が、第一天体の魂の位置に在るものであることのたとえであるように思われる。ここで「自身の像であるところのもの」とは、その技術知が生み出す人工物のことであり、それは第一天体のたとえであるように思われる。

さらに、技術知が「生み出されたものであり、（それ自身では）可能態に在り、現実態にはないのに応じて、自身の形相を可能的に受け取ることができるところのものを必要とする」とは、可能態に在るものであるかぎりでの第一知性体が第一天体になることのたとえであるように思われる。「可能的に受け取ることができるところのもの」「それ（形相）を基礎付け限界付けるところのもの」とは具体的には、その技術知が生み出す人工物の素材・質料のことを指していると思われる。

次にアルベルトゥスは、どのようにして第一知性体以外の諸知性体が第一知性から流出するかを説明する。

引用 6（引用 5 の続き）

だから私たちは、第一番目の知性体と呼ばれる第一知性体の成立を以上のように考える。「或る人々」が第一天の魂と呼ぶ第一天球の近接動者の成立も〔以上のように〕考える。そして私たちは、第一天球、すなわち第一天〔体〕の成立を、自身が可能態において存在していると〔第一知性体が〕知性認識するということに即して考える。ところで、第一原理の知性の光輝は第一知性体に流出しかつ満ち溢れるので、光輝の満ち溢れは再び第一〔知性〕と関係するということが成り立つ。そしてこのように自身を知性認識しているかぎりで〔知性の光輝は〕〔第一番目の知性体と〕同じ理由で第二番目の知性体を成り立たせる。これ〔第二番目の知性体〕は自身を「〔自身がそれ〕であるということ」に即しても知性認識する。そしてその場合〔第二天球の〕近接動者を成り立たせる。〔第二番目の知性体は〕可能態において在るということに即しても自身を知性認識する。そしてその場合、第二天〔体〕で

あるところの第二作動対象を成り立たせる。なぜなら〔知性体が〕能動知性において自身を知性認識するということは、事物を成り立たせるために知性的光輝を発するということだからである。第二知性体、第二動者、第二作動対象も以上のように考えられる。そしてこの知性体が再び、自身が第一知性に由来しているということを知性認識するかぎりで、満ち溢れる光輝において自身を知性認識しなければならない。そしてこの仕方で第三番目の知性体が成り立つであろう。〔第三番目の知性体が〕「〔自身がそれで〕あるということ」に即して自身を知性認識するとその場合、第三作動対象の動者が成り立つだろう。可能態において在るということに即して自身を知性認識するとその場合、第三作動対象、すなわち第三天〔体〕が成り立つであろう[15)]。

この箇所で「第一原理の知性の光輝は第一知性体に流出しかつ満ち溢れる」とは、第一知性の光輝は第一知性体に尽きるわけではないということを意味しているように思われる。

「（第一知性の）光輝の満ち溢れは再び第一（知性）と関係するということが成り立つ。そしてこのように自身を知性認識しているかぎりで、（知性の光輝は第一番目の知性体と）同じ理由で第二番目の知性体を成り立たせる」とは、第一知性体に尽きない第一知性の光輝が、第一知性体を流出させるのと同じように、第二知性体をも流出させるということを意味していると思われる。

「第二番目の知性体は自身を『（自身がそれ）であるということ』に即しても知性認識する。そしてその場合近接動者を確立する」「（第二番目の知性体は）可能態において在るということに即しても自身を知性認識する。そしてその場合、第二天（体）であるところの第二作動対象を成り立たせる」とは、第一知性体が第一天体の魂となり、また、第一天体にもなるの

15）*De causis*, lib. 1, tract. 4, c. 8, p. 56, ll. 38–62.

と同様に、第二知性体も第二天体の魂になり、また、第二天体にもなることを意味していると思われる。

「そしてこの知性体が再び」では、第一、第二知性体に起こったことと全く同様のことが、第三知性体以下の諸知性体にも起こることが示されていると思われる。

ところで、引用 6 によれば、第二知性体以下の諸知性体は、第一知性体と同じく、可能態に在るものでもある。そしてこれはアヴィセンナの立場とは異なるように思われる。というのも、アヴィセンナによれば、諸知性体（知性認識）に下位の知性体（知性認識）、天球の魂、天球という三つのものが存在する可能性は第一知性認識（知性体）に由来する[16)]。それに対してアルベルトゥスによれば、少なくとも第二、第三知性体が各天体の魂であり、各天体になるのは、それ自身が可能態に在るものからであるように思われるのである。

以上の通り、アルベルトゥス『「原因論」註解』で理解されたアヴィセンナ的宇宙論は、上記の通り異なるところはあるものの、アヴェロエスの立場を取りいれつつ、基本的なところではアヴィセンナ本人の宇宙論と同じであるように思われる。すなわち、神からその知性的光輝によって第一知性体が流出し、それがその可能態のゆえに第一天球の魂や第一天球になり、さらに神と上位の知性体とからそれらの知性的光輝によって下位の知性体が流出し、それがその可能態のゆえに各天球の魂や各天球になるのである。

2．アルベルトゥス独自の形而上学――流出流入論

アルベルトゥスは以上のような彼のアヴィセンナ流出論理解をさらに普遍化・一般化して、「流出流入論」とも呼ぶべき彼独特の形而上学を打ち立てる。彼はまず自身の『「原因論」註解』第 1 巻第 4 論考第 1 章「事物

16）前掲拙論 2 引用 7 参照。

が事物から流出するとは一体何か」で、流出について以下のように語る。

引用 7

原因を有するもの〔結果〕がいかにして原因から流出するかということを今我々は説明しようとしているので、流出それ自体は一体何かということを我々はまず最初に語らなければならない。なぜなら原因の区分と流出するものの原理の区分とは別だからである。というのも流出するのはただ、流出するものと、そこから流出が生じるところのものとにおいて一である形相を有するところのものだけだからである。それはちょうど川が、そこから流出するところの源泉と同じ形相を有し、水は両者において同じ種、形相を有しているのと同様である。このこと〔同一の形相を有していること〕は原因を有するもの〔結果〕と原因とにおいて常に在るわけではない。なぜなら或る原因は同名異義的に原因だからである。同様に、流出するということは同名同義的に原因であるということと同じではない。なぜなら同名同義的な原因と原因を有するもの〔結果〕とは時々他のものにおいて原因となるからである。しかしそこから流出が生じるところの源泉からは、基体において何かを質的変化の運動、あるいは他の何か〔の運動〕によって変化させるということなしに、ただ純一な形相だけが流出するのである[17)]。

この箇所によれば、「流出するものと、そこから流出が生じるところのものとにおいて一である形相を有するところのものだけが流出する」。つまり、流出の源泉と、その源泉から流出して来るものとは、同一の形相を有していなければならない。それは、川の水源と、そこから流れ出て来る川が、両方とも同じ水の形相を有しているのと類似している。

17）*De causis*, lib. 1, tract. 4, c. 1, p. 42, ll. 35-48.

それに対して原因とその結果とは常に同じ形相を有しているとは限らない。「なぜなら或る原因は同名異義的に原因だからである」。つまり、原因とその結果が同じ形相を有していない場合があるからである。

また、「流出するということは同名同義的に原因であるということと同じではない」。すなわち、たとえ原因とその結果が同じ形相を有していたとしても、その結果が原因から流出すると言えるとは限らない。「なぜなら同名同義的な原因と原因を有するもの〔結果〕とは時々他のものにおいて原因となるからである」。

この言葉は一体どのような意味であろうか。この疑問を解くカギは、次の「そこから流出が生じるところの源泉からは、基体において何かを質的変化の運動、あるいは他の何か〔の運動〕によって変化させるということなしにただ純一な形相だけが流出する」にあるように思われる。

この箇所によれば、流出の源泉からは、純一な形相だけが流出する。その際基体において質的変化その他の運動によって何かが変化するということはない。ここで運動変化と言われているものには恐らく、実体変化だけでなく、量的変化、質的変化、場所的変化などの付帯的変化も含まれているであろう。そこで生じる実体、量、質、場所などと、流出して来る純一な形相とは明確に区別されていると思われる。

もしそうだとするならば、上述の「同名同義的な原因と原因を有するもの〔結果〕とは時々他のものにおいて原因となる」とは次のような意味であると思われる。すなわち、或る原因がその結果と同じ形相を有していても、その原因がその結果の形相を生じさせる際に、その原因と結果とが上述のような運動変化をも生じさせるならば、その運動変化は流出ではない。実際「他のものにおいて」の「他のもの」とは、運動変化、あるいは、運動変化が起こる場所である基体のことであるように思われるのである。

アルベルトゥスはこのことを、技術知の例で次のように説明する。

引用 8（引用 7 の続き）

それはちょうど技術知の形相が純一な技術知から流出すると我々が語る場合と同様である。これ〔技術知の形相〕は、自身の乗り物であるところの精気のうちに在って、製作者の両手や諸器官に流出するときと、自身の起源としての技術知自体において受け取られているときとで同じ内容を有している。なぜならもし流出する形相がそこへと流出するところの質料を何かが変化させるにしても、しかしそのこと〔質料を変化させること〕は流出がそこから生じるところの原理の本質に属する何ごとでもないからである。そうではなく、能動・受動する諸性質〔熱・冷・湿・乾〕は、基体を道具的に変化させる何か他の原因を有している。それはたとえばまさかりや斧が、質料のために物体的に利用される製作者の道具であって、流出する技術知の形相のため、あるいは、この流出の原理であるところの技術知のためではないのと同様である。だから、原因が何かに作用するのはただ〔原因が〕何らかの基体において存在している場合のみであるが、しかし流出がその特質から示すのはただ純一な形相原理自身からの形相の発出のみであるので、流出するということは原因であるということと同じでないのは明らかである[18)]。

この箇所によれば次のようであると思われる。すなわち、人工物の純一な技術知それ自体からその純一な技術知の形相が流出する。その形相が、精気を乗り物として、製作者の両手や諸器官に流出する場合、それらに量的、質的、場所的等の付帯的変化が生じるかもしれない。それはたとえば精気や両手の質的変化や場所的移動などである。

しかしたとえそうだとしても、その運動変化は、流出の源泉としての流出の源泉の本質に属する事柄ではない。そのような付帯的変化は、製作者

18）*De causis*, lib. 1, tract. 4, c. 1, p. 42, ll. 48–63.

の精気や両手や諸器官を技術知の道具として変化させる何か他の原因によって引き起こされているのである。この「何か他の原因」とは、最終的には事物の可能性のことであるように思われるが、このことは引用 14 以下で議論される。

引用 9（引用 8 の続き）

さてさらに、〔流出するということは〕原理であるということと同じでもない。なぜならもし原理であるもののうちに力が生じるならば、原理はすべて、〔原理が〕それの原理であるところの事物の何かである。このことは名称自体にも影響している。なぜなら原理とは事物の第一のもののことだからである。しかしここで我々がそれについて語っているような流出の源泉であるものは、常に事物の何かなわけではない。なぜなら第一源泉は何ものにも混ざり得ず、〔第一源泉が〕成り立たせるところの何らかの事物の部分ではあり得ないからである[19)]。

この箇所によれば、「原理はすべて、（原理が）それの原理であるところの事物の何かである」。それに対して「流出の源泉であるものは、常に事物の何かであるわけではない」。つまり、流出の源泉は、他の事物の何かである場合もあれば（その場合はその事物の原理たり得る）、そうでない場合もある。

「なぜなら第一源泉は何ものにも混ざり得ず、（第一源泉が）成り立たせるところの何らかの事物の部分ではあり得ないからである」。ということは、流出の源泉が、他の事物の何かである場合でも、それは、その事物と混ざったり、その事物の部分であったりするという意味では決してないということになる。

以上から、アルベルトゥスが考える流出の特徴を次の三つにまとめるこ

19）*De causis*, lib. 1, tract. 4, c. 1, p. 42, ll. 64-71.

とができるように思われる。すなわち①流出の源泉と、そこから流出するものとは、同一の形相を有している②流出の源泉から流出するのは純一な形相だけであり、流出はいかなる運動変化でもない③流出の源泉は他の事物の何かではあり得るが、他の事物と混ざったり、他の事物の部分であったりはし得ない。

このような理解をアルベルトゥスは同箇所で「流出とは、すべての形相の源泉、起源であるところの第一源泉からの形相の端的な流出である」とまとめている。そして上記の三つの特徴から、流出の源泉は、或る意味で原因であり原理であるが、だからといってすべての原因や原理が流出の源泉であるわけではないということが示されていると思われる。

以上のようなアルベルトゥスの流出論は、ただ単に新プラトン主義的ともアリストテレス主義的とも言い難いように思われる。ただしアルベルトゥスは同箇所で、自身が考える流出に次のような新プラトン主義的な特徴が有ることを補足し確認している。

引用 10

それ〔流出〕において純一な形相の第一起源自身は、自身から発出する形相を、自身を減じることなく自身を伝えることによって自身から放射する。それはちょうど光線が光から発出し、光線そのものは〔光線が〕それに当たるところのものにおいて、自らを拡散させ多数化し反射させることによって、できるかぎり光輝の第一源泉に似た光輝を成り立たせるのと同様である[20)]。

この箇所によれば、純粋な形相の第一起源は形相を、光が光線を放射するように放射し、その際自身を減じることはない。

20）*De causis*, lib. 1, tract. 4, c. 1, p. 43, ll. 16–22.

引用 11

しかしもし何が第一源泉にこの流出を放射させるのかと問われるならば、何ものも第一のもののうちへと作用することはできないので、次のように言わなければならない。〔第一のものは〕常に現実態において在り、善性の豊富さから常に溢れているので、第一のものの伝達可能性そのものがこの流出を生み出す。なぜならその〔第一のものの〕外部には、それ〔第一のもの〕を可能態から現実態へと引き出す、あるいは能力態から作用をさせるところの何ものも存在しないからである。〔中略〕そしてもし、流出するものの乗り物は何かと問われても〔その問いは〕何も問うていない。というのも乗り物によって運ばれている形相は物体的であり、それを運ぶ精気のうちに物体的存在を有している。しかしここで第一源泉からの流出は本質に即しても存在に即しても知性的であり純一である。このため〔流出するものは〕それ自身の伝達可能性でなければ乗り物は有していない。なぜなら我々がそれについて語ったところの第一のものはその卓越した純一性のためにすべてのものに浸透しているからである。そしていつでもどこにでも存在するものがそれに欠けるところのものは何もないのである[21)]。

これらの箇所によれば、第一源泉は、他の何ものによるのでもなく、自身の伝達可能性により流出を生み出す。

アルベルトゥスは次に彼の『「原因論」註解』第 1 巻第 4 論考第 2 章「流入とは何か」で彼の流入論を以下のように展開する。

引用 12

ところで、流入するということは以上のような流出を受容可能な何かに注入するということである。このことは四つの仕方で起こる。①第

21）*De causis*, lib. 1, tract. 4, c. 1, p. 43, ll. 26-32; 48-56.

一には、〔形相が〕流出の第一原理において有しているところの、流出する形相の特質に即してである。それはたとえば第一原理が自身の光輝の流出によってそれを成り立たせるところの知性体の成立のために流入するにせよ、すでに成立している知性体をより照らすために知性体の上に流入するにせよ、〔いずれにせよ〕第一原理、普遍的能動知性が知性体に流入する場合である。②第二の仕方でこのこと〔流入〕が起こるのは、流入する光輝の暗さに即してである。すなわち第一源泉の透明さから離れているということからである。それはたとえば物体への依存のために第一の透明さ、純粋さが陰らざるを得ないところの魂が成立するために〔光輝が〕流出する場合である。③第三の仕方で〔流入が〕起こるのは第一光輝の降下に即してである。第一光輝は知性的光輝の特質から降下して物体的になる。なぜなら諸々の能動的なものの現実態が諸々の受動するもののうちに在るのは諸々の受動的なものの可能態、可能性に即してだからである。このようにして〔第一光輝は〕物体性を受け取ることができる質料へと流出するのである。④第四の仕方は、陰と混ざっているものが流出する場合である。それはたとえば、第一光輝の透明性、純粋性と対立するところの対立性によって区別され、多様性の下に在る質料へと〔光輝が〕流出する場合である[22)]〔①～④は訳者〕。

この箇所によれば、アルベルトゥスが考える流入とは、流出を受容可能な何かに注入することである。そして流入には四つ在る。すなわち知性体への流入、魂への流入、天体への流入、月下の物体への流入である。

ここで魂とは、引用 3 で「諸天において魂の位置に在るもの」と語られたもののことであると思われる。また第三の流入が起こるのは天体においてであると思われる。なぜならアルベルトゥスは同著作において流出流

22）*De causis*, lib. 1, tract. 4, c. 2, p. 44, ll. 5-29.

入について語る場合、常に第一原理・普遍的能動知性、知性体、天体の順番で語っているからである。

第四の仕方で流入が起こるのは月下の物体においてであると思われる。なぜなら「対立性によって区別され、多様性の下に在る質料」とは、月下の諸物体の質料たる第一質料の説明にふさわしいと思われるからである。

アルベルトゥスは以上のような区別をさらに、技術知にたとえて次のように説明する。

引用 13（引用 12 の続き）

だから〔光輝は〕離れているものとして、降下しているものとして、終焉しているものとして、陰に覆われているものとして流出する。このことのたとえは技術知の光輝から生じる形相のうちに在る。この形相は技術知の光輝において最も純粋であり、運搬者である精気においては〔技術知の光輝の純粋さから〕離れており、製作者の諸器官において終焉しており、諸々の石や木においてははなはだしく陰に覆われている。しかしこれらすべてのものにおいて〔技術知の光輝から生じる形相は〕同一なのである[23)]。

この箇所では恐らく、知性体への流入が技術知の光輝そのものにおける形相に、魂への流入が精気における形相に、天体への流入が製作者の諸器官における形相に、月下の物体への流入が石や木における形相にたとえられていると思われる。

引用 14（引用 13 の続き）

しかしもし「流入する influere」と言われるとき、接頭辞〔in〕によってもたらされている内容は何において在るかと問われるならば、流

23）*De causis*, lib. 1, tract. 4, c. 2, p. 44, ll. 30-36.

入がそれに生じるところの事物の可能性においてと言わなければならない。この事物の可能性は〔その事物〕自身に由来する。実際無に由来するものはすべてそれ自身からは無であり、それ自身から有するのはただ存在へと向かう可能性のみであるということは以前に述べられている諸々のことにおいてすでに規定されているのである。この可能性はその存在の原因であるものによって満たされるとき、自身へと流出している存在を保持する。そしてこのこと〔受容・保持〕が固有な意味で流入と呼ばれる。たとえ流入は第一のものの側に由来し、受容と保持は第二のものの側に由来するとしてもそうである。このことからもし第二のものがさらに流出、流入するならば、流出するのはただ第一のものの力によってのみであるということは明らかである。なぜなら〔第二のものは〕「それであるということ」に即せばただ受容と保持の可能性のみを有するということがすでに述べられているからである[24)]。

この箇所によれば、流入が生じるのは、正確には事物の可能性においてである。そしてこの事物の可能性は、第一のもの、すなわち第一原理たる普遍的能動知性にではなく、その事物自身に由来する。

このような事物の可能性・可能態の捉え方は、アヴィセンナの理論をより普遍化・一般化したものと理解することができる。すなわち「それ（第一者の結果）の存在可能性は、それ自身（その本質）におけるそれ（第一者の結果）による何かであり、第一者が原因のものではない」とアヴィセンナは語っていたのである[25)]。ここで「第一者の結果」と呼ばれていたのは、第一者のすぐ下位の第一知性（体）のことである。

引用 14 によれば、以上のような事物の可能性は、「自身へと流出している存在を保持する」。ここでの「存在」は形相、あるいは知性的光輝と

24）*De causis*, lib. 1, tract. 4, c. 2, p. 44, ll. 37-50.
25）注 1 拙論 2 引用 3 参照。

言い換えても良いだろう。そして「このこと（受容・保持）が固有な意味で流入と呼ばれる」。つまり、固有な意味での流入とは、引用 12 冒頭で語られたように「流出を受容可能な何かに注入する」ことであると言うよりもむしろ、事物の可能性が流出を受容・保持することなのである。

そして「第二のもの」、すなわち流入がそれに生じるところの事物からさらに流出が生じ、他の事物において再び流入が生じる場合、それは「ただ第一のものの力によってのみである」。このことについてアルベルトゥスは次のような説明を加える。

引用 15（引用 14 の続き）

このことからさらに、流出、流入するすべてのものの順序においてより先であるものは後のものへと流出し、後のものは第一のものへ再流出することはなく、後のものは常により先のものに基礎付けられているということは明らかである。そしてもし後のものが〔何かを〕欠いても、第一のものは〔その何かを〕欠かない。しかしもし第一のもの、あるいは何であれ先行するものが〔何かを〕欠くならば、後のすべてのものは必然的に〔その何かを〕欠くのである。第一のものだけが普遍的に流入するが、しかし第二のすべてのものは、第一のものからより離れているのに従ってより少なく普遍的に、より個別的に〔流入する〕ということも明らかである。一方保持は、諸々の可能性がそれによって限界付けられているところの側面〔可能態〕から、諸々の第二のものが有するのであって、第一のものは有さない。そうではなく第一のものは、いかなる仕方ででも可能態にはないので、いかなる仕方ででも限界付けられない。だからその〔第一のものの〕流出も豊かさのうちに在り、普遍的に在り、何らかの個別的な受容性や流出へと制限されてはいないのである[26)]。

26）*De causis*, tract. 4, c. 2, p. 44, ll. 51-66.

この箇所によれば、「流出、流入するすべてのものの順序においてより先であるものは後のものへと流出し、後のものは第一のものへ再流出することはなく、後のものは常により先のものに基礎付けられている」とは一体どのような意味であろうか。この文の意味は、次の「後のものが（何かを）欠くにしても、第一のものは（その何かを）欠かない。しかしもし第一のもの、あるいは何であれ先行するものが（何かを）欠くならば、後のすべてのものは必然的に（その何かを）欠く」という文章が明らかにしているように思われる。このことはさらに次の文章で、次のようにより明快に言い換えられている。すなわち「第一のものだけが普遍的に流入するが、しかし第二のすべてのものは、第一のものからより離れているのに従ってより少なく普遍的に、より個別的に（流入する）」。

なぜこのような相異、順序が生じるのであろうか。引用14によれば、「第二のもの」、すなわち、流入がそれに生じるところの事物は「ただ第一のものの力によってのみ」流出流入する。だから、第二のものも、第一のものも、第一のものの力によって流出流入することに変わりはない。それゆえ、上述のような相異、順序は、「第二のもの」の可能性の相異、順序に由来するのでなければならない。

「一方保持は、諸々の可能性がそれによって限界付けられているところの側面（可能態）から、諸々の第二のものが有するのであって、第一のものは有さない」の「側面」とは、可能態のことであるように思われる。なぜなら次に「そうではなく第一のものは、いかなる仕方ででも可能態にはないので、いかなる仕方ででも限界付けられない」と語られているからである。だから、上述のような「第二のもの」の可能性の相異、順序も、「第二のもの」の有する可能態の相異、順序によるものであるように思われる。

引用1で「（普遍的能動知性は）この仕方で（能動的に）知性認識するかぎりで自分自身によって事物を成り立たせ、その事物に従って自身の知性の光輝が限界付けられる」と語られていたが、ここでの「限界付けられる」とは、上述のような、「第二のもの」の可能性、可能態による限界付

けのことであるように思われる。

以上のようにアルベルトゥスによれば、流入とは、固有な意味では、諸事物の可能性が、自身へと流出している形相・存在を受容・保持することである。それら可能性の相異、順序は、諸事物の可能態によって限界付けられている。そのことによって諸事物の順序が生み出されているのである。

3．ま　と　め

以上の通り、アルベルトゥスによれば、神から第一知性体が流出し、それが第一天球の魂や第一天球になり、さらに神と上位の知性体とから下位の知性体が流出し、それが再び各天球の魂や各天球になる。そこで流出とは、第一源泉（神）からの形相の端的な流出であり、一方流入とは、事物の可能性（可能態）が流出を受容・保持することである。このような流出流入は、諸知性体、諸天球の魂、諸天球に限らず、月下の諸物体を含め、宇宙全体に及ぶ（流出流入論）。

このようなアルベルトゥスの理解が成立した背景には次のような哲学史的展開があったように思われる。すなわち、アヴィセンナによれば、第一者（神）は第一知性認識の存在可能性に存在必然性（現実態における知性認識）を与えるだけである[27]。また上述の通り、諸知性体（知性認識）に下位の知性体（知性認識）、天球の魂、天球という三つのものが存在する可能性は第一知性認識（知性体）に由来する。

それに対して、アヴェロエスによれば第一者は、第一知性認識に与える存在必然性（アルベルトゥスに言わせれば知性的光輝）を通して、諸存在者の原因であって差し支えない[28]。またアルベルトゥスによれば前述の通り、各知性体が各天体の魂や各天体になるのは、各知性体が有する可能態ゆえである。このようにアルベルトゥスは前述の通り、アリストテレスが物体にしか用いなかった可能態という概念を、諸知性体（知性認識）が有する、

27）前掲拙論 2 引用 3 参照。
28）前掲拙論 3 引用 2 参照。

アヴィセンナ言うところの存在可能性にも適用する。

このようにして初めて、神の現実態を様々な可能態が受容するという仕方で全宇宙を説明するアルベルトゥスに独自な形而上学たる流出流入論は成立し得たのであり、それはアルベルトゥス一人の力によるものではなかったのである。

付記　本研究は JSPS 科研費 JP19H01204 の助成を受けたものです。